3

宋板傷寒論の三陰三陽篇の成立について—異本との条文比較による検討—

牧角和宏

〔はじめに〕 宋板傷寒論の三陰三陽篇（いわゆる六経病篇）における傷寒の病態概念と治療方針は、素問熱論篇（内経）や諸病源候論に見られるそれとは一見異なっている。

このような事情も関与したためか、内経とは異なる体系であるとして、内経の概念を導入せずに傷寒論を解釈する研究が日本では踏襲され、五経一貫の態度で傷寒論に接した研究者（内藤希哲など）は少数派であった。

一方中国では、内経の概念を応用した傷寒論の解釈が一般的であるが、病態論の矛盾についてはほとんど論じられていない。

従来の傷寒論研究は、日中いずれも成無已の注解傷寒論（成本傷寒論）以降の板本をテキストとし、三陰三陽篇に主眼がおかれたものが主であった。可不可篇、弁脈法、平脈法、傷寒例および宋板傷寒論から成無已が削除した部分についての研究はごく少数である。

成本傷寒論の祖本は林億らが宋以前の医書を編纂（新校正）した宋板傷寒論である。

現在、宋板傷寒論は明趙開美校刻仲景全書中にその姿を留めている。また、宋以前の医学全書である脈経巻七、千金方、千金翼方巻九・十、外台秘要および太平聖恵方巻八などには宋板傷寒論相当条文がまとまった形で多数引用され、伝来、現存している。

成本傷寒論以前の傷寒論が存在する以上、傷寒論の研究は宋板傷寒論および宋板以前の諸本に引用された傷寒論条文の比較校合を出発点とする必要があると考えられる。

これら宋以前の医書と宋板傷寒論の比較研究については、すでに森立之の「傷寒論攷注」や小曽戸、真柳、岡田、馬、劉、銭らの精力的な業績があるが、三陰三陽篇における傷寒の病態概念の相違に注目した研究は少ない。

そこで、宋板傷寒論三陰三陽編と素問熱論との病態概念の矛盾がどのように生じたかを明らかにする目的で以下の検討を行った。

〔目的〕 宋板傷寒論三陰三陽編の病態・治療概念を異本との比較対照で検討した。

〔方法〕 宋板傷寒論（明趙開美本）および脈経巻七、千金翼方巻九・十、太平聖恵方巻八の全文および千金方、外台秘要の傷寒論対応条文をワープロ活字化し、三陰三陽篇各条文の対応条文番号一覧表および比較表を作成し、条文の成り立ちについて検討した。

〔結果と考察〕 太平聖恵方や千金翼方に引用された傷寒論には素問熱論や諸病源候論に近しい病態概念が認められ、宋以前には内経に忠実な傷寒治療がなされていた（推奨されていた）ことが示唆された。

宋板は太陽病ですでに過発汗をいましめる記載があり、陽病において吐下法にまで言及し、陰病ではむしろ吐下法を否定し、温法を治療原則とするなどの編集がなされている点は、素問熱論と大いに異なる。

陽病を全て発汗させ、陰病で下法を用いるという素問に忠実な治療のみでは、過発汗や過下などの行き過ぎた治療による誤治をしばしば招く、という臨床経験上の反省に基づいた概念の変遷による記載と考えられた。

一方、素問熱論で論じられた傷寒の病態概念と治療方針が宋板で必ずしも全て否定されている訳ではない。即ち「陽病発汗陰病吐下」の治療原則を支持すると解釈しうる条文群（陽明病の桂枝湯・麻黄湯、少陰病・厥陰病における承気湯類）や小文字の注文が存在しており、これらは太平聖恵方巻八（林億らの校訂を経ていないという点で宋以前の姿を伝える重要資料である）にも対応していた。

〔結語〕 宋板傷寒論三陰三陽篇は、素問に忠実な旧来の思想に沿った条文群と、行き過ぎた教条主義を戒める条文群とが混在する、「ダブルスタンダード」で成り立ったテキストであると認識することにより、内経との矛盾を解決し得ると考えられた。このような二重構造による記載が成立した背景には、時代的な疾病構造の変化も関与していることが想定され、今後の検討課題としたい。

（北陸大学薬学部東洋医薬学教室）